

# 牛久：学校周辺に見る自然

第5号 ひたち野みずべ公園（ひたち野うしく小）

2019年4月28日発行

## ＜ みずべ公園で、春の生きもの観察。～②草本 ＞

4月15日、16日、ひたち野うしく小4年生とのみずべ公園春の生きもの観察。今回は、<sup>そうほん</sup>草本です。



4月に多く見られるスミレのなかま。タチツボスミレ（左上）、ニオイタチツボスミレ（右上）、アカネスミレ（左下）。

まずは、スミレのなかま。一番多いのはタチツボスミレですが、数年前とくらべだいぶ減ってしまいました。いい匂い<sup>にお</sup>がするニオイタチツボスミレも咲いていました。かわって少しずつ<sup>ふ</sup>増えているのがアカネスミレ。それぞれどんな環境を好むか、第2号を参考<sup>さんこう</sup>にして下さい。考えさせられます。



よく似た<sup>に</sup>黄色い花。キジムシロ（左上）、ミツバツチグリ（右上）、ヘビイチゴ（左下）。

<sup>したくさ</sup>下草もかられ明るい<sup>ぞうきばやし</sup>雑木林には、キジムシロやミツバツチグリが咲いていました。違い<sup>ちが</sup>がわかりますか？湿ったところには、これもよく似たヘビイチゴが咲き出しています。どれも、小さなハチが、よく蜜<sup>みつ</sup>を吸い<sup>す</sup>に来ます。ヘビイチゴは、赤い実ができる<sup>に</sup>と目だちますね。



明るい雑木林ぞうきばやしの下には、フデリンドウさも咲いていました。曇りの日などには花が閉じてしまい、見つけにくくなります。かわいい花ですね。小さなハチがもぐっていることもあります。花の色は青色の濃さに差があり、時々赤みがかって、赤あか紫からピンクに近いものも見られます。いつまでも、このみずべ公園で見られるといいなと思います。やはり、こういう花は、雑木林ぞうきばやしに咲くのが美しい。

**明るい雑木林ぞうきばやしの下に見られるフデリンドウ。**



フデリンドウの近くで、ようやく咲き始めたのがジュウニヒトエさ。校庭でも見られるホトケノザやヒメオドリコソウと同じ、シソ科のなかまです。シソ科には、どんな特ちょうがあったか、おぼえていますか？



明るい雑木林ぞうきばやしに見られるジュウニヒトエさ(左)と、校庭でも見られるヒメオドリコソウ(右)。



やはり似たようなところに咲いていて、「これ、なあ〜に？」と聞かれたのが、スズメノヤリめ。よく見ないと、これが花だとは分からないかもしれませんね。雌しべが先に出て、他のスズメノヤリの花から運ばれた花粉かふんがつくと、雄しべおが後から開いてきます。こうして同じ花の花粉かふんがつかないようにすると、いいタネができるのですよ。

**めしべが先に開くスズメノヤリ。**



キク科のなかま。ノゲシ(上左)、ハハコグサ(上中)、ハルジオン(上右)。オオジシバリ(中左)、ヤブタビラコ(中右)。セイヨウタンポポ(下左)、オニタビラコ(下中)、ノボロギク(下右)。

さて、外国から来たものも多いのですが、一番たくさんの種類が見られたのがキク科のなかまでしょう。セイヨウタンポポ（ヨーロッパ<sup>げんさん</sup>原産）やハルジオン（北アメリカ<sup>げんさん</sup>原産）、ノボロギク（ヨーロッパ<sup>げんさん</sup>原産）、オニタビラコ、ハハコグサなど、校庭でよく目にするものもありますね。タンポポは、よく探すと写真のような変なものも見つかります。校庭では見られないのは、オオジシバリとヤブタビラコでしょうか。どちらも、田んぼのあぜなど<sup>しめ</sup>湿り気の多いところでよく見かけます。ビオトープの池や湿地がよい<sup>しっち</sup>状態<sup>じょうたい</sup>の学校では、植えたのかもしれませんが、見られることもありますね。それぞれの草花が、どのようなところに<sup>さ</sup>咲いていたかも<sup>きろく</sup>記録しておくといよいでしょう。



こちらは、菜の花と同じアブラナ科のなかま。虫めがねで花を見ると、どれも菜の花と同じく花びら4枚が十文字にならんでいます。校庭で見かけるのはナズナとミチタネツケバナですが、みずべ公園には、田んぼに多いタネツケバナもたくさんありました。昔はこの花の咲くころにイネの種もみを水につけて田の準備をしたそうで、そこからついた名です。  
**アブラナ科のなかま。ナズナ（上）、タネツケバナ（左下）、ミチタネツケバナ（右下）。**



しめ 湿りけの多いところには、こんな草花も見られました。グリム童話の『ラプンツェル』にも登場するヨーロッパ原産のノヂシャ。時々、水をかぶるようなところでも花を咲かせるトキワハゼ。田のあぜなどに多いケキツネノボタン。通路ぞいに咲いているムラサキケマンは、果実が熟すと手をふれただけで種子をはじき飛ばします。



湿りけの多いところに咲くノヂシャ(左上)、トキワハゼ(右上)、ケキツネノボタン(左下)、ムラサキケマン(右下)。



コガタルリハムシ<sup>ようちゅう</sup>が食<sup>は</sup>べ、穴<sup>あな</sup>ぼこだらけにな<sup>は</sup>った葉も  
多く見<sup>み</sup>られたのはスイバとギ  
シギシのなかま。違<sup>ちが</sup>いが分<sup>わ</sup>かり  
ますか？スイバの葉は茎<sup>くき</sup>を包<sup>つつ</sup>  
み、だくようにつ<sup>つ</sup>きますが、  
写<sup>しゃ</sup>真<sup>しん</sup>のエゾノギシギシのよう  
に、他のなかまは葉<sup>は</sup>に柄<sup>え</sup>があつ  
て茎<sup>くき</sup>につ<sup>つ</sup>きます。ギシギシ、ア  
レチギシギシ、ナガバギシギシ  
もあつて、花<sup>は</sup>や葉<sup>は</sup>が少<sup>すく</sup>しづつ  
違<sup>ちが</sup>います。むずかしいね。

スイバ(左)と、エゾノギシギシ(右)。



リンドウに似<sup>に</sup>た鐘<sup>かね</sup>のよう<sup>な</sup>花<sup>を</sup>つ<sup>け</sup>るアマドコロ(左)と、早春<sup>はる</sup>から青<sup>あお</sup>い小<sup>こ</sup>さな花<sup>を</sup>を多<sup>おほ</sup>数<sup>かず</sup>つ<sup>け</sup>るオオイヌノフグリ(右)。

最後<sup>さいご</sup>に、あまり目<sup>め</sup>だたないけれど、鐘<sup>かね</sup>のよう<sup>な</sup>かわい<sup>い</sup>花<sup>を</sup>をぶ<sup>ら</sup>下<sup>げ</sup>るアマドコロと、まだ他の花<sup>は</sup>  
が咲<sup>さ</sup>き出<sup>で</sup>さないころから小<sup>こ</sup>さな青<sup>あお</sup>い花<sup>を</sup>をた<sup>く</sup>さんつ<sup>け</sup>るオオイヌノフグリ。そして、もう少<sup>すく</sup>し前<sup>まへ</sup>には  
た<sup>く</sup>さん出<sup>で</sup>ていたけど、す<sup>す</sup>っかり緑<sup>き</sup>の細<sup>ほ</sup>い葉<sup>は</sup>?にお<sup>お</sup>きか<sup>か</sup>わ<sup>わ</sup>つてしま<sup>ま</sup>ったつくし(スギナ)。オオイヌ  
ノフグリはオオバコ科<sup>オオバコ</sup>クワガタ<sup>クワガタ</sup>属<sup>ぞく</sup>というグル<sup>ぐ</sup>ープに入<sup>い</sup>る植<sup>しょく</sup>物<sup>ぶつ</sup>ですが、花<sup>は</sup>を虫<sup>むし</sup>めがね<sup>がね</sup>で見<sup>み</sup>ると、2本<sup>ふた</sup>  
の雄<sup>お</sup>しべ<sup>しべ</sup>がクワガタの大<sup>おほ</sup>あご<sup>あご</sup>のよう<sup>に</sup>に内<sup>うち</sup>側<sup>がわ</sup>にわ<sup>わ</sup>ん曲<sup>ま</sup>して<sup>い</sup>ておもしろ<sup>い</sup>です。スギナはつくしが成<sup>せい</sup>長<sup>ちやう</sup>し  
て緑<sup>き</sup>の葉<sup>は</sup>を出<sup>い</sup>した姿<sup>すがた</sup>にな<sup>な</sup>ると思<sup>おも</sup>っている人<sup>ひと</sup>もいま<sup>いま</sup>すが、それ<sup>それ</sup>は違<sup>ちが</sup>います。右<sup>みぎ</sup>の写<sup>しゃ</sup>真<sup>しん</sup>のよう<sup>に</sup>、「つくし」



と「スギナ」は地<sup>ち</sup>面<sup>めん</sup>の下<sup>した</sup>でつ<sup>つ</sup>なが<sup>が</sup>  
つて<sup>い</sup>ます。「胞<sup>ほう</sup>子<sup>し</sup>(ほうし)」とい<sup>い</sup>う  
なかまを<sup>ふ</sup>増<sup>ま</sup>やす<sup>つ</sup>ぶをた<sup>く</sup>さんば<sup>ら</sup>  
ま<sup>ま</sup>く「つくし」がし<sup>し</sup>おれ<sup>れ</sup>始<sup>はじ</sup>める<sup>ころ</sup>  
に緑<sup>き</sup>の「スギナ」が伸<sup>の</sup>び<sup>の</sup>て<sup>き</sup>て、お  
日<sup>ひ</sup>さまの光<sup>ひかり</sup>を受<sup>う</sup>けて自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の栄<sup>えい</sup>養<sup>よう</sup>をつ  
くる<sup>の</sup>です。また、細<sup>ほ</sup>い緑<sup>き</sup>の部分<sup>ぶぶん</sup>は  
茎<sup>くき</sup>と枝<sup>えだ</sup>で、節<sup>ふし</sup>にあ<sup>あ</sup>る黒<sup>くろ</sup>っ<sup>く</sup>ぽい<sup>の</sup>のが  
葉<sup>は</sup>な<sup>な</sup>のです。「胞<sup>ほう</sup>子<sup>し</sup>(ほうし)」で<sup>ふ</sup>増<sup>ま</sup>  
える植<sup>しょく</sup>物<sup>ぶつ</sup>につ<sup>つ</sup>いては、中<sup>ちゅう</sup>学<sup>がく</sup>校<sup>こう</sup>で勉<sup>めん</sup>強<sup>きやう</sup>  
し<sup>ま</sup>すよ。【理<sup>り</sup>科<sup>か</sup>支<sup>し</sup>援<sup>えん</sup>員<sup>いん</sup>：宮<sup>みや</sup>内<sup>うち</sup>】

つくし(左)と、地<sup>ち</sup>面<sup>めん</sup>の<sup>の</sup>下<sup>した</sup>のよう<sup>な</sup>す(右)。